『大坂物語』延宝頃うろこがたや版の挿絵

柳沢昌紀

はじめに

『大坂物語』は、慶長十九年（一六一四）の大坂冬の陣、翌年の同夏の陣に取材し、各陣の直後に、それぞれ上巻と下巻が古活字版で刊行された。両陣の合戦の様を描き、豊臣家の滅亡を記す。

本書の古活字版本文の異同については、川瀬一馬氏、中村幸彦氏、朝倉治彦氏、菊池真一氏、渡辺守邦氏、中村博司氏らの考証が備わる。[1] 一方、整版の版種については、かつて渡辺守邦氏が網羅的な調査を行っている。『新日本古典文学大系・仮名草子集』[2] 解説によれば、「古活字版に六種九版があり、整版に寛永版以下の多種があって、享保年間にまで及ぶ盛行を示す」とのこと。渡辺氏は「『大坂物語』の諸版」[3] で、明暦四年（一六五八）本屋久次郎版、寛文八年（一六六八）問屋版、同じく寛文八年松会版の三種の江戸版の存在を報告している。筆者の調査では、ほかに明暦四年松会版（存上巻）[4]、さらに延宝（一六七三〜八一）頃うろこがたや版があることが判明した。

『大坂物語』の江戸版五種のうち、最後発と思われる延宝頃うろこがたや版は、上巻に四図、下巻に三図の挿絵

を有する。筆者はかつて、それら七図が全て『嶋原記』寛文十三年（一六七三）山本九左衛門版の挿絵を覆刻流用したものであることを報告した。[5] しかし紙幅の関係で、七図のうち二図についてしかふれることができなかった。本稿では、七図全ての絵柄の変更について検討するとともに、この挿絵流用の意味について若干の考察を行ってみたい。

一、『嶋原記』寛文十三年版と『大坂物語』延宝頃版

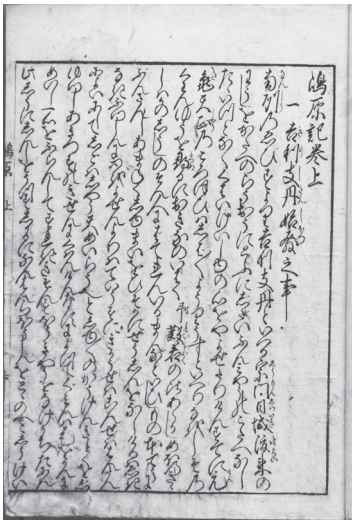
『嶋原記』は、寛永十四年（一六三七）に勃発し、翌年終結した島原の乱を題材とする。初版については無刊記十二行本説と慶安二年（一六四九）刊十行本説とがあるが、朝倉治彦氏が『仮名草子集成』三八[6]の解題に記す、慶安二年刊十行本説を支持したい。それに続くのが無刊記十二行本で、いずれも上方版である。それに対して寛文十三年版は半葉十五行で、本書の最初の江戸版かと思われる。

ここで、『嶋原記』寛文十三年山本版の略解題を示す。用いたのは中京大学図書館蔵本である。

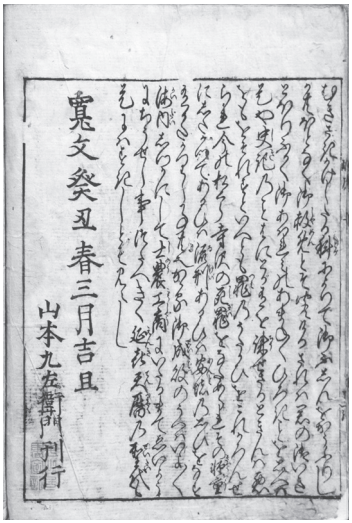
中京大学図書館蔵（貴一二六）

寛文十三年（一六七三）山本九左衛門刊。三巻。大本四冊。

巻頭



刊記



表紙　青鈍色表紙。二七・一×一九・二糎。

題簽　左肩双辺題簽「版新」嶋原軍物語一（三、四）」（第二冊のみ後補墨筆題簽）。

序　上巻第一丁。

目録題　「嶋原記巻上目録」、「同巻中目録」（以上、上巻二オ）、「同　巻下目録」（上巻二ウ）。

内題　「嶋原記巻上（中、下）」。

柱　「嶋原　上　一（〜十七）」。
「嶋原　中　一（〜十六）」。
「嶋原　下　一（〜廿二終）」。

匡郭　四周単辺。二二一・三×一六・六糎（上巻三オ）。

本文　毎半葉一五行、行二九字内外、漢字平仮名交り、濁点・読仮名付刻。

挿絵　上巻の四ウ五オ、八オ、一一オ、一四オ、一七オ。
中巻の二ウ三オ、六オ、九オ、一二オ、一五オ。
下巻の二ウ三オ、六オ、九オ、一四オ、一七オ、二〇オ。

丁数　上―一七丁（含序・目録）、中―一六丁、下―二二丁（第三冊―一二丁、第四冊―一〇丁）。

刊記　下巻終丁ウ本文一一行の後に
「寛文癸丑春三月吉旦／山本九左衛門刊行」。
印記　「長島町五丁目／大野屋惣八」（墨印）、「平出氏／書室記」（平出鏗二郎）。
備考　料紙はいわゆる江戸版風。

中京大本は、蔵書印によれば貸本屋大惣、平出鏗二郎の旧蔵本で、名古屋に伝わった本であることがわかる。刊記の「寛文癸丑」は、寛文十三年である。この版の挿絵は上巻五図、中巻五図、下巻六図で、各巻第一図のみが見開き挿絵となっている。

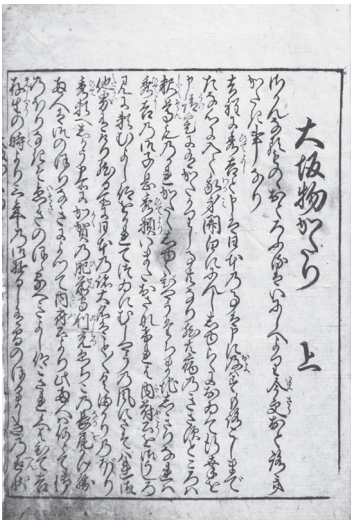
次に、『大坂物語』延宝頃うろこがたや版と、その後印本の略解題を記す。

柳沢蔵甲本

〔延宝頃〕うろこがたや刊。存下巻。大本一冊。
表紙　卍繋ぎ地唐草文様を空押した濃縹色表紙。二七・二×一八・七糎。
題簽　左肩後補題簽に「大坂物語　下」と墨筆書き。
内題　「大坂物かたり　下」。
柱　「大坂物かたり　十九（〜三十四）」。
匡郭　四周単辺。二一・九×一六・八五糎（下巻一オ）。
本文　毎半葉一六行、行三二字内外、漢字平仮名交り、濁点・読仮名付刻。頸帳は毎半葉一五行、四段。

甲本刊記

乙本巻頭



挿絵　下巻の二〇ウ二一オ、二五オ、二九オ。
丁数　下―一五・五丁（含頸帳二・五丁）。
刊記　後表紙見返の頸帳最下段末尾に「うろこかた〔や〕」（下部破損）。
印記　なし。
識語　見返に「九月吉旦／主岡安氏」。
備考　料紙はいわゆる江戸版風。

柳沢蔵乙本

〔延宝頃うろこがたや〕刊後印。二巻。大本二冊
表紙　卍繋ぎ地唐草文様を空押した濃縹色表紙。二七・三×一八・八糎
題簽　左肩双辺題簽「絵入新板大坂物語頸帳入（下）」。
内題　「大坂物かたり　上（下）」。
柱　「大坂物かたり　一（～十八）」、下巻は甲本に同。
匡郭　四周単辺。二一・四×一六・六五糎（上巻一オ）、二一・九×一六・八糎（下巻一オ）。
本文　甲本に同。

乙本巻末

挿絵　上巻の二オ三ウ、七オ、一三オ、一六オ。下巻は甲本に同。

丁数　上―一八丁、下巻は甲本に同。

刊記　なし。

印記　なし。

識語　上巻見返に「此本何方へ参候共／石澤氏御返し可被下候／石澤弥五兵衛」、下巻見返しに「何方へ参候共石沢氏／方へ御返し可被下候」。

備考　料紙はいわゆる江戸版風。

柳沢蔵甲本は、下巻しか存在しないが、本文の後に付された頸帳の末尾に、残念ながら下部に破損があるものの、「うろこかた〔や〕」と記されている。この版は半葉十六行の典型的な江戸版で、恐らく延宝頃の刊行かと思われる。柳沢蔵乙本は、そのやや後印本である。末尾のうろこがたやの刊記は削去されてしまっているが、上下二巻の揃い本である。ちなみに渡辺氏が「『大坂物語』の諸版」で「17刊年不明版」と記す大阪府立中之島図書館蔵本は、この版に一部新彫別版を交えた修訂本である。幸いなことに、挿絵部分に補刻は施されていない。

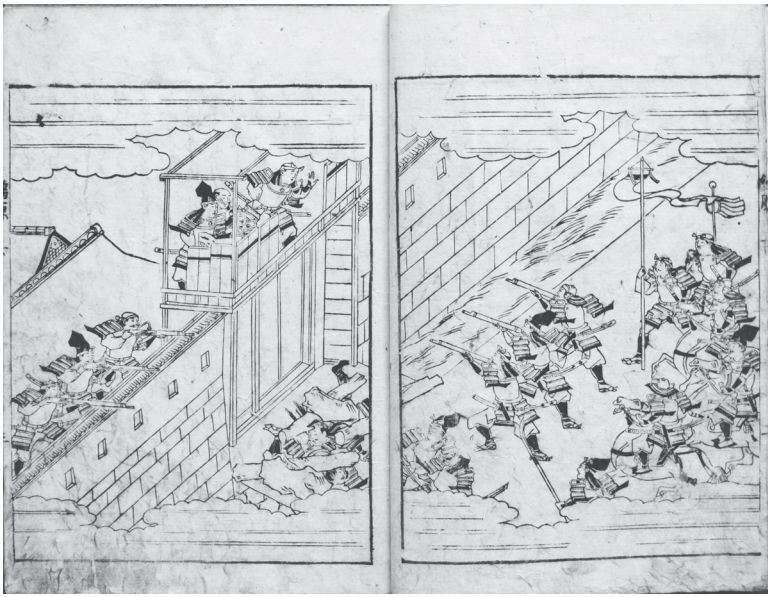
『大坂物語』延宝頃うろこがたや版は、前述のとおり、上巻に四図、下巻に三図の挿絵を有する。これも『嶋原記』寛文十三年山本版同様、各巻第一図のみが見開き挿絵となっている。以下、柳沢蔵乙本を用いて、これら七図の検討を行いたいと思う。

二、『大坂物語』延宝頃版の挿絵の実態

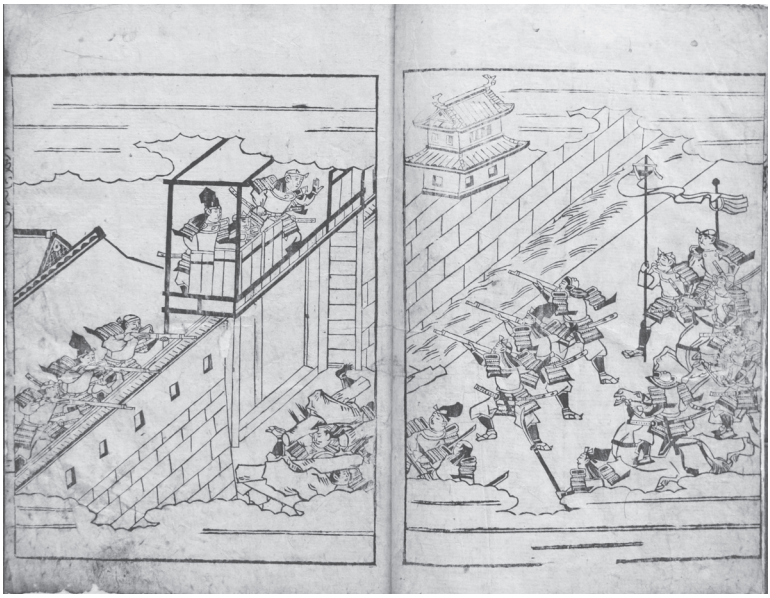
『大坂物語』延宝頃うろこがたや版の挿絵が、『嶋原記』寛文十三年山本版の挿絵をどのように利用しているのか、その実態を見てゆきたい。以下、『大坂物語』の挿絵の順番に検討することにし、上段に『嶋原記』寛文十三年山本版の挿絵、下段に『大坂物語』延宝頃うろこがたや版の挿絵を示す。

まずはAだが、見開きの挿絵である。まるで新聞等に載っている間違い探しのように、どこに違いがあるのか、わかりづらい。一番大きな違いは、右頁上に城の櫓があるか、ないかであろう。ほかの部分は、構図という点では殆ど違いが認められないのではないかと思われる。細かく見ていくと、左頁の城門らしきものの上の見張り台の枠組みが白抜きか黒か、さらにその後方の屋根のような部分にも白抜きか黒かの違いが見て取れる。

上段の『嶋原記』は、下巻「一　元日原の城二番攻之事」の挿絵である。一揆軍が籠城する原城を、寛永十四年十二月に板倉重昌率いる討伐軍が攻めたが失敗した後、翌十五年元日に再度攻撃するもまた敗れたことを記す。下段の『大坂物語』は、上巻の関ヶ原合戦の前哨戦である九月十四日の晩の大垣城攻めのあたりに位置している。ちなみに『大坂物語』の関ヶ原合戦の記事は、寛永無刊記版以下の整版では、古活字版より記述が詳しくなっている。



A 『嶋原記』下巻第一図



『大坂物語』上巻第一図

次にBだが、これこそ間違い探しである。例えば右側一番下の武将の左肩のところが上は白、下は黒になっている。そんな感じで、武者達の着衣の文様や具足の一部に若干の変更が加えられている。

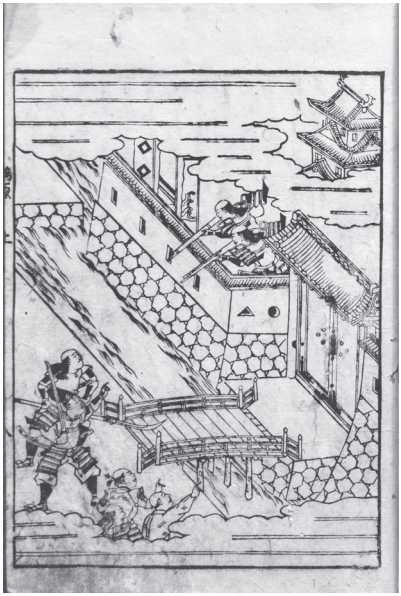
上段『嶋原記』は、中巻「一　吉利支丹等嶋子取懸幷本渡合戦の事」の天草本渡合戦の場面である。それが下段の『大坂物語』では、冬の陣の城外戦の場面に流用されている。

B　『嶋原記』中巻第二図

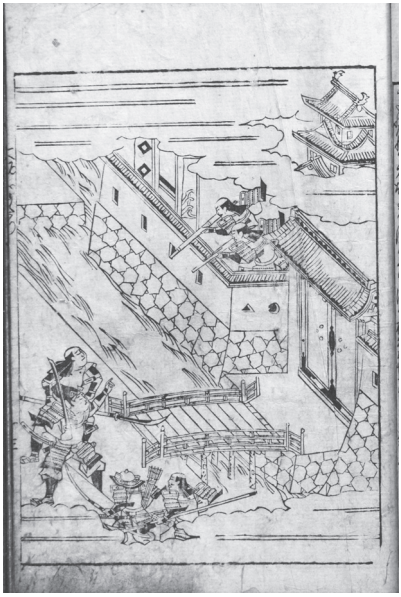
『大坂物語』上巻第二図

Cは、これも構図は殆ど同じだが、橋の左下の二人の人物が、上段は町人風、下段は武将となっている。

上段『嶋原記』は、上巻「二　松倉人数深江村へをしよする事郷人等高来の城つけいらんとせし事」の挿絵である。この「松倉人数」とは肥前島原藩主松倉長門守勝家方の軍勢で、「高来の城」は島原城のことである。したがってこの挿絵は、籠城する島原藩勢を一揆軍が攻めている場面と思われる。対する下段の『大坂物語』は、冬の陣の攻城戦の場面ということになる。大坂城を攻めているのは徳川勢だから、武将に変えたのであろう。



C　『嶋原記』上巻第二図



『大坂物語』上巻第三図

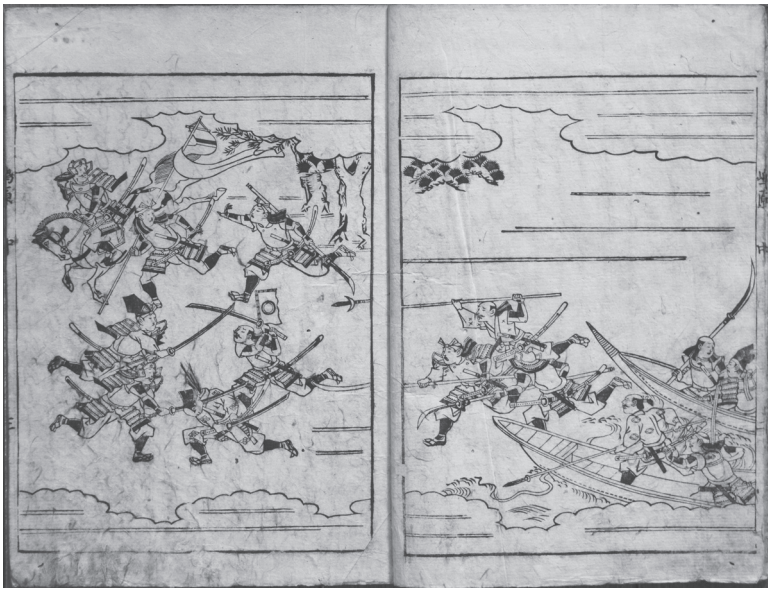
次にDだが、一番大きな違いは、右側の旗指物に記された印であろうか。

上段『嶋原記』は、下巻「二　松平伊豆守信綱戸田左門氏継有馬下向之事付隣国より加勢の事」の挿絵である。板倉重昌の討伐軍が二度の原城攻撃に失敗した後、新たに着陣した松平信綱率いる討伐軍が軍議を催している場面かと思われる。下段の『大坂物語』は、旗印が「大」という文字だが、ひょっとすると大坂方の大野修理を中心とした軍議ということであろうか。

D　『嶋原記』下巻第二図

『大坂物語』上巻第四図

Eは見開きの挿絵であるが、上段右側の船が着船する絵柄が下段では騎馬武者や歩行武者に変更されている。



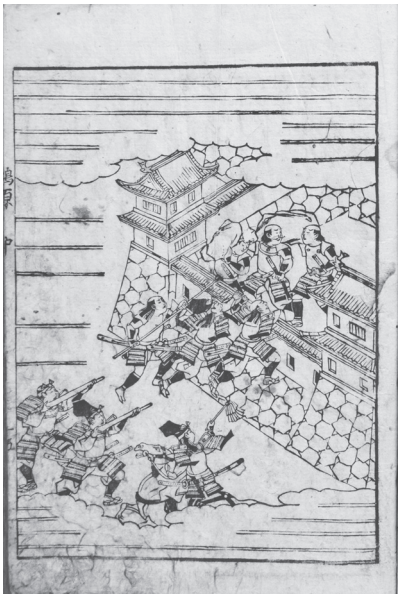
E 『嶋原記』中巻第一図

『大坂物語』下巻第一図

上段『嶋原記』は、中巻「一　吉利支丹等嶋子取懸并本渡合戦の事」の前半の嶋子取懸の場面で、天草四郎を大将とする島原の一揆勢が海から天草の嶋子に攻め寄せる様が描かれている。これが下段の『大坂物語』では、夏の陣の合戦場面に転用されているのである。着船の絵柄が採用されなかったのは、当然といえよう。

続いてFだが、これも間違い探しである。

上段『嶋原記』は、中巻「四　十二月廿日原城一番攻の事」の挿絵である。先にも述べた、板倉重昌率いる討伐軍が一揆軍の籠城する原城を攻める場面かと思われる。下段の『大坂物語』は、関東方の武者達が大坂城を攻める場面と解せる。

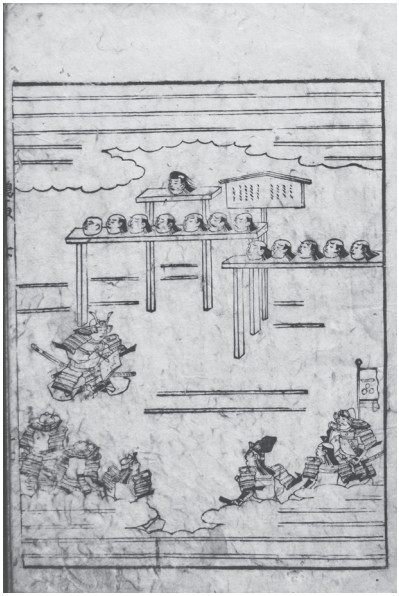


F　『嶋原記』中巻第五図

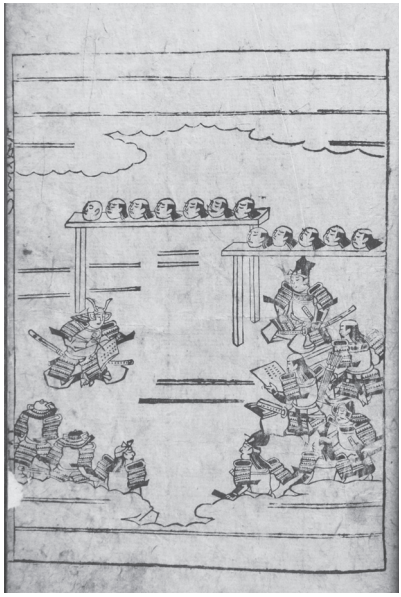
『大坂物語』下巻第二図

最後にGである。これはかなり変更が加えられている例と言えよう。

上段『嶋原記』は、下巻「四　二月廿七日吉利支丹落城之事」の挿絵である。棚に並べられているのは、討伐された一揆勢の頸である。一段高いところに置かれているのが、大将天草四郎の頸であろうか。下段の『大坂物語』は、これが末尾の挿絵で、この三丁後から頸帳となっている。棚に並べられているのは、言うまでもなく大坂方の頸である。天草四郎の頸と高札が削られ、右側に三人の武将が加えられている。そのうちの一人は、まさに頸帳を手にして、それを読み上げているように見える。



G　『嶋原記』下巻第五図



『大坂物語』下巻第三図

以上のごとく、『嶋原記』寛文十三年山本版の挿絵は、『大坂物語』延宝頃うろこがたや版に流用されていることがわかった。松会や（本）問屋に追随する形で『大坂物語』を刊行したうろこがたやの、安易な挿絵制作の実態が判明した。

おわりに

柏崎順子氏は、松会版の悉皆調査を試み、次のような興味深い知見を述べている。[7]

松会が出版した本を、同様に江戸版様式で造本していた山本九左衛門・本問屋も出版していることに気がついた。（中略）京版を元版にして複数の江戸版が作られる場合、松会が必ずその複数の江戸版刊行者の一人になっていることもわかってきた。（中略）鱗形屋が出版する本は、松会・山本・本問屋のグループとは、ごくわずかな往来物を除いて、ほとんど重複しない。（中略）鱗形屋も、数点ではあるが、先行する京版が存する江戸版を出版しているものの、それと同じ本を松会・山本・本問屋のグループが出版することはない。

すなわち、江戸の出版業界に棲み分けが存在していたことを明らかにした。しかし、その棲み分けは万治・寛文期に限定されるものであったという。[8]

松会のグループと鱗形屋が明確に異なる営業のコンセプトを有していたのは万治・寛文期のことであり、延宝以後は京版を江戸版に仕立て直すシステムが崩壊したことにより、鱗形屋と松会のグループが一緒に相版を出版したり、鱗形屋がかつて松会が出版した本のテキストを出版するといった現象が生じている。

鱗形屋が、かつて松会や（本）問屋が出版した『大坂物語』を、延宝頃に刊行したことは、以上の見解を否定す

るものではない。うろこがたやは、先行する松会や（本）問屋とは異なる挿絵を採用し、新味を出そうとしたものと思われるが、その実態はここまで見てきたとおりであった。

ちなみに山本九左衛門が出版した『大坂物語』は、管見に入っていない。いわゆる江戸版様式の造本を行う版元間で、別書の挿絵を流用する事例の報告は、これまで恐らくないのではないかと思われる。この期の挿絵の権利問題について検討するためには、類例が存在するか否かを探る必要があろう。

注

（1）川瀬一馬氏『増補古活字版の研究』（ＡＢＡＪ、昭四二）、同「大英博物館の古活字版」（「青山女子短大紀要」二二、昭四三・一一）、中村幸彦氏「大坂物語諸本の変異」（「文学」四六―八、昭五三・八）、朝倉治彦氏『仮名草子集成』九（東京堂出版、昭六三）、菊池真一氏「『大坂物語』古活字一巻本本文研究」（「近世初期文芸」五、昭六三・一二）、同「『大坂物語』古活字一巻本本文変化の意味」（「甲南女子大学研究紀要」二五、平一・三）、同「『大坂物語』古活字二巻本本文研究」（「近世初期文芸」六、平一・一〇）、渡辺守邦氏・竹下義人氏・樹下文隆氏「影印・古活字版『大坂物語』零本――稀本零葉集索引稿番外」（「調査研究報告」一〇、平一・三）、渡辺守邦氏「古活字版『大坂物語』考」（「実践国文学」三七、平二・三）。中村博司氏「『大坂城之画図について――古活字版『大坂物語』付図の詳細と考察」（「大坂の歴史」七二、平二一・一）。

（2）岩波書店、平三。

（3）「実践女子大学文学部紀要」三二、平二・三。

（4）位田絵美氏「明暦四年松会版『大坂物語』について」（「近世初期文芸」三三、平二八・一二）に、位田氏ご

所蔵本の詳しい紹介がある。

（5）「東海近世」二一（平二五・五）の「表紙図版解説」。

（6）東京堂出版、平一七。

（7）「江戸版考—版権の様相」（「日本古書通信」九四八、平二〇・七）。

（8）「鱗形屋」（「言語文化」四七、平二二・一二）。